

Trial & Error *No.110*

トリアル・アンド・エラー

試 行 錯 誤



写真提供/毎日新聞社

特集 JVCプロジェクト'91

JVCの新しい動き.....	2	エチオピア	16
アジアでは.....	3	イラク 湾岸被災民救援	17
タイ 地域開発	4	環境プロジェクト.....	18
難民支援	6	総会報告.....	20
カンボジア	8	JVCってどういうところ?.....	22
ラオス	10	東京グリーンウォーク'91大成功...	23
ベトナム	12	新しく会員になった方々.....	24
定住難民	14	新人スタッフです よろしくね...	27
アフリカ・中東では.....	15		

JVCの新しい動き

昨年から今年にかけてのJVCの大きな動きとしては、まずソマリアからの撤退があげられる。7年半にわたる活動には、のべ42人の日本人がかかわった。内戦によって難民たちはまたエチオピアに逃げ、彼らとともに作り上げた農場が今どうなっているのか、知るすべもない。

このプロジェクトは、私たちに苦い経験を残したが、難民問題とは何なのかも教えてくれた。つまり、大国による国境線の線引きへのしっぺ返しであることを。ソマリアという国は、国際援助によって成立していたといっても過言ではない。膨大な援助は、国際社会の大きな負担とソマリアの依存体質を生んだ。私たちもこの援助に加わっていたわけで、自分たちのやっていることがどういう意味を持つのか、常に考えておかねばならないと肝に命じた。

ソマリアのプロジェクトの終了と相前後して、ベトナムでの活動が始まった。統一はしたものの遅々として進まない経済建設、硬直化した官僚主義、いっこうに減らないポートピープル。JVCが行っている職業訓練は、帰還難民と地元の人々を対象にしている。現在は卒業してもなかなか就職口がみつからず、洋裁などの技術を身につけたら自営になった方がよいという。プロジェクトは始まったばかりで課題も多いが、ベトナムの自由化政策が進めば徐々に変わっていくだろう。

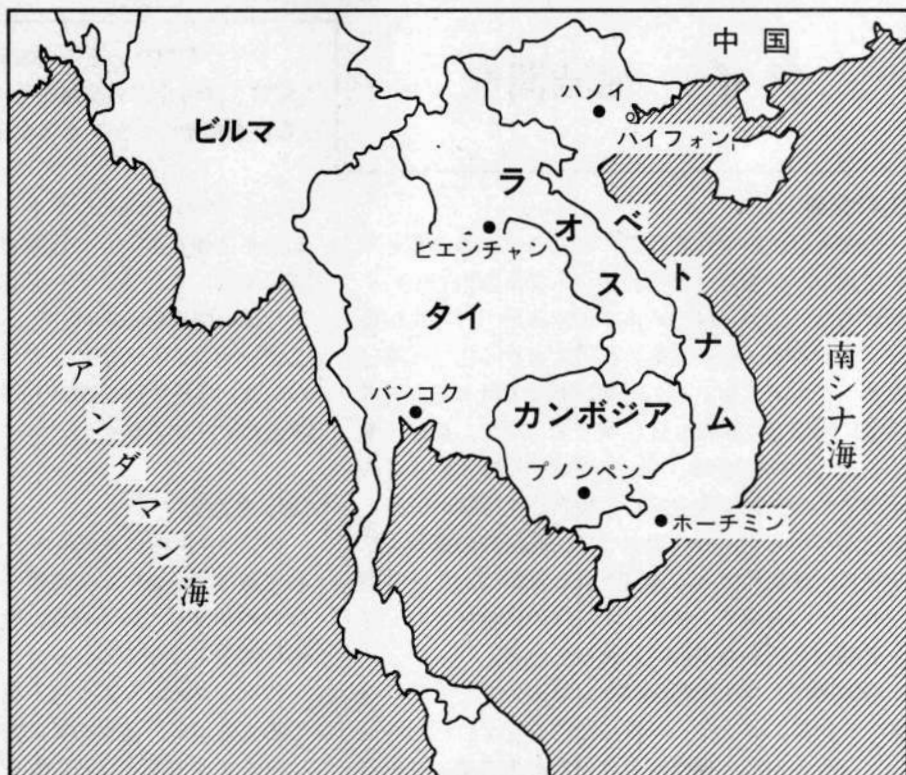
もう一つの新しい動きは環境プロジェクトの開始である。タイでの農村開発をさらに進め、生態系の回復までめざしている。かつて森に依存していた人々は、開墾などで広大な森を失ってしまった。このプロジェクトでは、単一換金作品に頼らず、まず自給用の食料を作り、その余剰を売ることが農民に勧めている。また、木々を切り払ってしまった山に再びいろいろな苗木を植え、森を回復する試みも始まった。

さらに、これは予定していたものではなかったが、イラクでの緊急救援も始まった。昨年のイラクのクウェート侵攻による避難民の問題以来、JVCはこの地域にどのようにかわるべきか議論を続けてきた。湾岸戦争は、無法者イラクを国際社会が叩いた形になっていて、中東地域への欧米の介入と、それに端を発した石油の利権争いであったことはあまり論じられていない。口実にせよサダム・フセインが、パレスチナ問題を取り上げたことは理にかなっていた。結局JVCは、短期的には、どこからも援助される見込みのないイラク国内の戦争被災民の救援を、長期的にはパレスチナ問題にかかわっていくことを決めた。現在は、クルド人も含めたイラク国内での救援活動を行っている。

このような海外での活動に呼応するように、国内の動きも活発化してきた。ここ数年来800人前後の会員数だったが、今年は1000人の大台を越えた。会員以外にも募金などによってJVCを支えて下さる方、JVCのカレンダーやコンサート、チャリティーウォークなどのイベントの参加者など、なんらかの形でJVCにかかわっている人の数は1万人を越えているのではないかと思う。これには、郵便局の国際ボランティア貯金への大きな反響など、一般の人々のNGOに対する関心が高まっていることも影響しているようだ。

国内での財団化への動きがなかなか進まない一方で、タイのJVCは財団化へ向け積極的に動いている。財団化によって社会的な信用を増すと同時に、法人としての資格がないと難民救援プログラムが閉鎖された場合、日本人はタイでの活動が難しくなるからである。やがてタイのJVCはタイのNGOとして独自の道を歩きはじめるかもしれないが、財団化されても日本との関係に大きな変化はない。

アジアでは……



難民から復興・開発へ

10年前、カンボジア、ベトナム、ラオス各々の国からタイに入ってきた難民への救援で始まったJVCは、それぞれの国内に入り、地に足をつけて生きようとする人々を支援する活動に入っていた。それはまた、難民を作り出さないための努力でもある。昨年からはベトナムで始めた職業訓練活動は、難民流出の予防を含めた失業対策である。そして、ベトナム戦争から続いている経済制裁の中でも、旺盛に生き延びようとする人々と連帯することである。

カンボジアでは、国際的に孤立した国内に入り活動を続けてきたNGOグループの国際世論への訴えが実り始めたのか、タイ国境地区へ集中していた海外援助が徐々に国内にもまわり始めた。その流れの中で、JVCの活動も量的に拡大するとともに、農村部の復興へ目を向け始めた。

タイでは、パナニコムの終了が決まり、カオイダンキャンプでの活動も難民帰還に向けて焦点を合わせた。地域開発が中心となった今、難民救援の資格のみで円滑な活動を続けることが困難になり、JVCタイの財団法人化を進めることになった。

環境へ

「援助協力という言葉には持てるものが持たざる

者に施すという感じがあり嫌悪感があったが、環境問題に関わることによって、はじめてアジアの人々と同じ土俵に乗れたような気がする」と誰かが語っていたが、今や『環境』は地球の上での共存の可否を問うキーワードである。

タイでは日本からの投資、高度成長にともない、農村部で商品作物栽培が進み、森林は耕地として開かれまたたく間に消失した。農民たちの手には、わずかな消費物資と引き換えに、荒地と干ばつと借金が残された。そして、彼らの栽培したとうもろこしを飼料にして育てた豚肉を食らい、綿で作った服を着ているのは私たち自身である。アジアの問題を解決しようとするなら、日本に住む私たちの生活をも問い直さざるを得ない。

そしてJVCでは、こうした悪循環を立ちきろうとする農民を軸とする環境復興に着手した。それも、東南アジア各地の農民会議や人材交流の形でネットワークを作りながら進められている。ラオスでは、こうしたタイとの連携の中に、農民たちが環境を壊さない今後の村生活のやり方を見いだしてくれることを期待している。また、調査研究部門を設け、地球環境の変容に関する科学的な裏付けを取り、日本社会に対する提言も行ってゆく。（林 達雄）

タイ 地域開発

タイは都市化とともに農村の疲弊、スラムでの麻薬や賭博などの問題を生んでいる。JVCの活動も社会構造にかかわざるを得なくなっている。

農村開発

消費社会、換金作物経済にほんろうされ、職を求めて都市へ、海外へと農村から人々が流出していく現状を食い止め、村ぐるみで自給自足の方法を模索する農村開発（正式名称：農村における自立促進のためのプロジェクト）は、少しずつではあるが村人の間に浸透してきた。魚を飼う池を掘り、果樹・葉草を植え、家畜を飼って、家庭レベルで水や養分の循環する生態系を完成させる複合経営農業の奨励と、お金もかからず、副作用もない伝統医療の復興を二本柱に、住民によって運営される米銀行、生活共同組合店、共有地での植林、学校への給食プロジェクト援助など活動も多岐にわたっている。

今年度は、今までのブリラム県のムアンフェーク区の5村に、コクサート区の2村を加え、活動を拡大するとともに、他県で自立のための農業を試みる人々との交流も行う。

図書館活動

バンコクの経済的繁栄とともにその人口は年々増え続けている。農閑期になると図書館のあるクロントイスラムには農村部から親類を頼って、老若男女が一時的に住み着く。多くのスラム住民と同じように建設労働者や日雇い人夫として働く一方、スラムにはヘロイン、シンナー、違法なトランプ賭博などによる一攫千金のチャンスもある。健康な居住環境を作りだしていくために、今年からシンナー防止プログラムをはじめ。また、コミュニティの雰囲気

を変えていくためにシンナーやヘロインの専門的な知識を広報していく。活動の第一段階として図書館前に運動場を作ることから始めた。

今後の図書館活動は、地域の人々とともに学び運営していくことを大事にしていきたい。字の充分読めない人、学校に行っていない子供たちを対象にタイ語、算数のコースも始めた。

奨学金活動

バンコク市内14カ所のスラムと南タイ3県で153名の児童に奨学金による支援を行っている。南タイへは学校が行っている給食、教育開発プログラムのために基金を支援する。

バンコクのスラムでは、高速道路やビルの建設による立ち退き、各々の家庭の経済的貧困など、子供には重すぎる不安な状況が常にある。高学歴社会が確実に築き上げられていくタイ社会の一方で、小学校を中退して家計のために働かなければならない子供もいる。状況を少しでも緩和させるため、さらに住民委員会や他のNGO、学校の教師らと連携しながらプロジェクトをすすめていく。10月には恒例になったキャンプを行う予定だ。

スラムでの奨学金活動も今年で12年目を迎えた。我々にできることは何なのか。常に問い続け検証しながら広範な視野にたった意味のある活動をめざしていきたい。（池島千津子）

◆これまでも家族と一緒にクロントイスラムに住んでいたから、JVCのことは知っていた。僕がJVCに働き始めて2カ月がすぎ、母が本や図書館活動に興味をもつようになった。

図書館ではスラムの人々が、自分の知識向上や興味のために、いろんなことを知るチャンスがあるから非常にいいと思う。僕自身は農業や環境問題にも興味があるので、新聞から関連記事を切りとり掲示板に貼るようにしている。

活動上の問題は、子供たちが騒いでうるさいこと、小さい子供には注意をして他のことに興味を向かせ

られるけれど、シンナーをやっている青少年たちと僕と年齢が大体同じのせいか、いうことをきいてくれない。本も読まず館内でブラブラしているので、中に入れないようにしたい。ゆっくり本を読みたい人のために、静かな部屋があればいいと思う。

JVCで働きはじめて日が浅いのでまだよくわからないことの方が多いけど、スラムでも農村でもいい活動をしているので、みんなにわかってもらい、活動が広まっていくことを願っている。

（ソムポップ・ラッタナワリー）



◀楽しい給食の時間。材料は学校菜園で作る



▲複合農業を営むアンフェーク村の農家 (右)
小学校を訪問し奨学生の調査をするスタッフ (左)



◀図書館で行われる子供ののための識字教室

♣今、図書館の前の湿地帯に運動場をつくらうとしている。半分くらいできたところで、土が足りなくなったが、陸軍の協力で土も得ることができた。今の悩みは協力してくれる大人が少ないこと。賃金を払うといえば、すぐにやるだろうけどそれはしたくない。子供たちは作業にも協力的だが、土運びをやっていてもすぐに飽きてしまう。何のためになぜ運動場をつくるのか、もう一度コミュニティと充分な話し合いをしたい。時間は長くかかっても、みんなの手でつくりたい。

(サムルアイ・ジョンヨークラン)



新プロジェクトを考える池島

タイ 難民支援

カオイダン難民キャンプは“カンボジア帰還民のための訓練センター”と名称を変え、着々と難民帰還の準備が進んでいる。

西崎憲司記念技術学校

1981年に、カンボジア難民の自立に役立つ機械技術を提供する場として開校した技術学校はいよいよ今年で10年目を迎えるが、その間に難民問題解決の方向性も「第三国定住」から「本国帰還」へと移行してきた。プノンペン政府と三派連合政府側との和平が一進一退をみせる中、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）が中心となって進めている本国帰還プロジェクトが軌道に乗る日に備え、JVCでもカンボジア帰還を前提としたプロジェクトを拡大している。

昨年度より、自動車修理の課程を修了した生徒を対象にスタートした自動車教習所はキャンプ内に理論のための教室と実習用のコースを新たに建設し、山形より贈られた車などを教材として運営されている。第一期生は指導員養成を目的としたためすでに運転経験のある者に限ったが、今後は初心者も受け入れていく。またここでは修了生には修了証書のみが与えられ、免許取得は本国に帰ってから各自で行う。一気筒エンジンのコースも、灌漑用ポンプや小型トラックへの応用に重点を置いている。

もう一つ、職業として成り立つ技術を身につけると同時に、帰国後の農機具の需要に応えるため鍛冶屋コースも開始した。農業プロジェクトを行う団体と提携するほか、精神障害者を対象とする団体の活動のリハビリの一環として、竹細工や漁網製作の分校も開設し、他団体との協力関係も深めている。

◆通算2年半、タイで人間も自然の一部であると理解した。久しぶりの日本、何と時間が、社会が速く回転するのだろう。自然と調和した時の流れに慣れてしまった私は呆然としてしまう。社会全体が秒針にあわせて動いているようだ。最近急増している様々な立場の在日外国人、彼らにこの日本という国はどのように映るのだろうか。彼らも日本社会の歯車に組込まれていく。しかし彼らの存在によってこの歯車が、それを動かす日本人の意識が変わるのではないだろうか。そんな期待をもっている。

（熊沢 ゆり）

パナニコム日本語学校

パナニコムキャンプは、第三国への定住が決定したインドシナ難民が待機し、定住に必要な準備をすすめるセンターであるが、1989年よりベトナム人に対する難民資格審査が導入されて以来、資格審査を待つ、あるいは難民として認定されなかったベトナム人の収容施設としても機能してきた。しかし認定を受けられなかったベトナム人をシキウキャンプに移送するという計画は、91年3月のベトナム人の反対デモで変更を余儀なくされ、以後は資格審査はシキウキャンプで行われることになった。

自主的本国帰還の奨励、キャンプの閉鎖などによる難民の減少にともない、パナニコム内の援助団体の活動も転機を迎えている。日本に定住予定の難民に日本語の指導、文化オリエンテーションをおこなってきたJVC日本語学校も、92年3月末をもってプロジェクトを終了する予定である。今年度は、90年11月からパナニコムに滞在している160人のラオス人難民が4、5グループに分かれて日本に出発する他、すでに親族が日本に定住しているカンボジア・ラオス難民グループが日本語学校の生徒となる。

新しいカリキュラムとしては、現在のラオス人グループに児童が多かったため5歳～13歳を対象に新しく「子供クラス」を開始した。基礎的な日本語、算数、レクリエーションなどを通じて、子供たちが楽しく学べる場を設けている。（今泉 恵）

♥タイ・カンボジア国境の密貿易が大変盛んになっている。クメール人は中国やチェコスロバキア製品をタイ国境へ売りに来る。タイ人もカンボジア側で買ったものをタイ側のブラックマーケットで売っている。特にアランヤプラテートのマーケットにはタイ中から安いクメール製品を求めてたくさんの人がやってくる。

マーケットのにぎわいを見て和平が近いなんて言う人も多いが、私にはわからない。20年国境沿いに住んでいて、一度だって戦闘が終わる気配を感じたことはないからだ。（ソムヨット・ラタナタム）



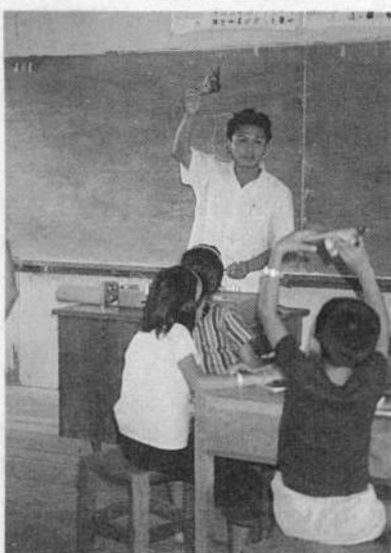
▲タイ政府から譲られたドライビングコース用のジープ



▲帰還に備え、かじ屋コースも始まった



◀日本語学校のベトナム人クラス



◀子供クラスのチャワリット先生(右)にわとり小屋を作る子供たち(左)

カンボジア

サンタピエップ技術学校

日本製の車が目につくようになったプノンペン市内。輸送にも多くの日本製トラックが使われているが、耐用年数が過ぎた車体に山積みされた荷物や凹凸の多い道路は、傷みを早めるだけでなく大きな事故を引き起こす原因となる。

JVC技術学校/ワークショップでは、運輸省自動車輸送公社と協力し、自動車整備士の養成、部品の供給を行い、同公社所有の100台余りのトラックの修理、メインテナンスに当たってきた。今ではカンボジア国内で活動している団体や国連の日本車修理・管理もしている。しかし、増える車の数に比べ自動車修理を手掛ける人材の養成が追いつかず、JVCでも92年度には倍の60名が学べるよう学校の拡張を考えている。また、今まで少数の孤児青年以外はほとんどが同公社のスタッフだったが、他の省や県のスタッフ、女性も入れる枠を作りたいという要望が運輸省から出されている。

「どんなに修理しても、壊れるところはおんなじ。本当はもうオーバーホールしたほうが良いような物ばかりなんだけど、充分部品がないからね」と馬さん。国内復興を支える輸送手段の自動車を維持・管理していくには、人材も部品もこれからさらに必要となっていくことだろう。

母子保健活動

「うまれた、うまれた、あたらしい子」

JVCがRINEセンター（母子保健所）を建てたプノンペン郡郡病院内の産科病棟には、常時、クローマー

ソ連や東欧の援助の削減、内戦の激化が伝えられる一方で、帰還者受け入れの準備が進められている。カンボジアは、今また大きな変化を迎えつつある。

（カンボジア製万能布）にくるまれた新生児が、母親の横ですやすやと眠っている。なぜか双子が多い。確かに以前より乳幼児死亡率は下がったが、未だに栄養失調や下痢による脱水症状など、ほんの些細な原因で死に至る子供の数は絶えない。

乳幼児の死亡原因に着目しユニセフ、保健省母子保健局とNGOが協力し進めてきたRINEプログラムも転換期を迎え、現在は子供プラス母親のケアに重点を置くようになった。また、90年度からJVCがプノンベン郡以外のカンダール県内6つの郡と県都の村々で、「助産婦、伝統産婆の技術向上訓練」や「保健スタッフの栄養トレーニング」を始めたのも、妊産婦を世話する現地の医療従事者育成が目的であった。

給水活動

89年のベトナム軍撤退以降激化した内戦と、90年のソ連・東欧の援助削減がこれほど響いたプロジェクトは少ない。90年度には、農業省水利局とOXFAM、LWS、JVCの3つのNGOは、共同で大型の掘削機による年間90本の深井戸掘りを計画したが、折りからの援助削減で水利局が調達するはずだった燃料のディーゼルが計画通り手に入らず、予定の半分以下の42本しか掘れなかった。

91年度は今までの水利局への援助を他の2団体に委ね、国政に左右されない、より地域の人々のニーズにあった清潔で安全な生活用水の確保を目指してカンダール県プノンベン郡で浅井戸や溜池作りに協力していく。（鈴木 由子）

◆毎年4月に日本へ帰って来る。今年も桜が散りぎわであった。技術学校の方も、ノブティムに来てもらってから順調に進んでいる。私もあと1年ぐらいで、とも思っていたが、昨年より帰還難民などの仕事等が予想されるので、もう少しがみついていることになりそうだ。

ともかく私としては、ワークショップも技術学校もかわいいとしかいいようがない。

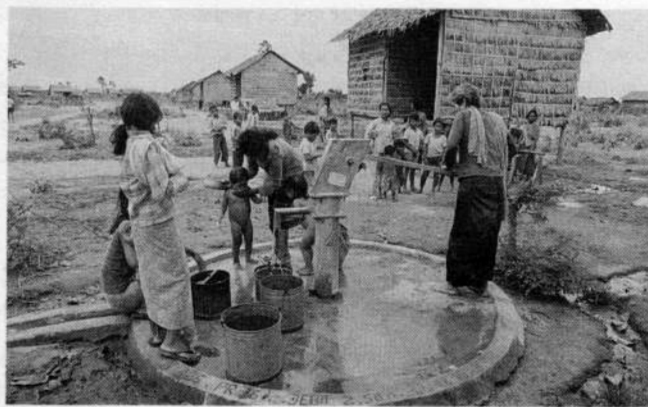
（馬 清）

♥英訳付漢字辞典、『トラベリング・ジャパン』、教科書……。助手席に積みあげられたこれらをどかして、ドライバーのソーさんは私の座る所を作ってくれる。英語の上手な彼は、我々がメカニック、馬さんが教えている日本語教室にも通っている。

今、プノンベンでは語学が盛んだ。最近ではJVCにも日本語を学びたいという人が訪ねてくるが、彼らの見ている日本は、日々増えてくる日本製品のイメージだけ。就職のためなら英語の方が、と忠告しつつも複雑だ。（飯島かんな）



◀ 帰還者受け入れを控え、機械技術者の需要も高まっている



▲ 避難民キャンプに掘られた井戸

◀ 乳幼児の体重測定をする竹井さん

(写真提供) 毎日新聞社

♣ プノンペンに着いてまだ1カ月もたたない、新米スタッフの私です。5月初旬にバンコクから朝早く、小さい飛行機に乗ってプノンペンを目指しました。着陸する時に上から見たプノンペンの様子は、朝日に照らされて広がる緑の平野に、椰子の木と民家が点在する箱庭のようにきれいな街に見えました。

もともと南国のふんいきが好きなので、真っ青な空と椰子の木と真っ赤な火炎樹の花を見ているとうれしくなってきます。見るもの聞くもの全てが新鮮で、好奇心いっぱいの鈴木でした。(鈴木 琴子)

♠ 今年は4月20日から雨が降るようになり、茶色が主流だった風景が緑色に変わってきた。木や草は、待っていましたとばかりに新芽をぐんぐん伸ばし、グングン成長。花を咲かせ実をつける準備をしている。日本の春から初夏にかけてのふんいきに似ている。時期も同じ。カチンカチンの田んぼの土は柔らかくなり、気の早い農夫は堆肥をまいて耕し始める。

この雨期の様子を見ると、せめて生活水だけでも十分に得られないかと、村を歩きながら思う。

(竹井 潤子)

ラオス

市場経済の導入によってラオスは、自給自足的な経済から海外の資本に依存する経済に変わろうとしている。ラオスの人々が市場経済の誘惑に負けない価値観を身につけることが大切だ。

ラオスは1975年、社会主義国家として歩み出したが、その後10年間人口の1割にも当たる人々が難民として国外に出ていった。それは思想統制の厳しさよりも、経済的貧困が大きな原因であったといえる。

ラオス政府はこの経済難を打開するために、市場経済の導入とともに様々な自由化措置をとったが、この移行こそが森林を切り出して売り、土地と農民を吸いつくす換金作物を作らせるといった「袋小路」へとラオス国民を追いやったのである。

女性生活改善普及員の養成

こうした状況下にあたったラオスを訪れたJVCは、「ラオス女性同盟」というすばらしいカウンターパートに出会った。農村の自給自足的な生活を西側中心の市場経済にからめ取られないよう守っていくためには、まずその活動に従事できる人材を育成することから始めなければならない。そうした考えに基づいてJVCは、1988年、ラオス女性同盟とともに「女性生活改善普及員養成プロジェクト」を開始した。

農作業、水汲み、薪集め、家畜の世話、家事、育児などのいっさいを担っているのは女性で、その女性たちを中心に自分たちの健康の問題を考え、自給自足的な農業生活を自然との融和の中で確立していくことがこのプロジェクトの目標である。

さらに昨年4月からはラオス人スタッフとしてタノンシー（男性）、マリペット（女性）が加わったが、彼らの存在は活動をすすめる上で非常に心強い。また、トレーニングを受けた普及員たちの活動も、ますます充実してきているようだ。井戸掘り、トイレ

作り、訪問調査・指導などによって衛生環境を整備し、複合的農業経営によって、バランスのとれた食物を自給する。これらの実践に必要なモデルを東北タイの農村に求めた普及員対象のスタディーツアーによって、普及員は着実に理想的な村の姿を描き、農民とともに実践することを楽しんでいるようだ。

伝統染色織物の保存

ラオス国民が誰にも搾取されない自立的な生活スタイルを確立するには、物・金中心の市場経済の誘惑に負けないようなしっかりとした価値観を身につけることが重要である。このことを踏まえて、今年度実施予定の「ラオス伝統織物展示会」が企画された。急激な海外流出の危機に瀕している伝統織物の価値を再認識させ、保存館の建設、織り手の養成につなげていきたいと考えている。ある織物専門家はラオスの伝統織物保護の重要性について述べている。

「ラオスの人々の生活基盤がまだ整っていないので、一般のラオス人の文化財についての意識はまだ低く、文化の『つながり』を持つアジアの一国日本の、ラオス文化へのサポートは重要な役割となる」。

物質至上主義の生活を謳歌する日本人がいくら「市場経済には気をつけろ」といったところで、大した説得力をもたない。むしろ私たちの仕事は、もうひとつの自立的な生活のあり方に対して敬意を持って学びながら、そのモデルになる隣国の人々と積極的につなげるチャンスを作り出すことであろう。そのひとつひとつの積み重ねの中にこそ、この国の将来が描き出されるに違いない。（小野 豪大）

◆「まずは村の人たちと話す事から始めなければいけないし、それしかないと思います。共に考え、決めてゆく…」と、普及員のナロン嬢は言った。

研修6カ月後の4月に行ったレビューミーティングでの事だ。あちこちの村を視察し、それぞれの活動がとても参考になったと普及員たちが言った。そこで、「では自分の村に帰って、いったいどこから手を付けたら良いか考えがある？」と聞いたときの答えが冒頭のナロンの発言だった。

22歳の彼女はいま一生懸命だ。いや彼女ばかりで

はない。カイソンもブンルットもマライトンもボンサマイも、みんな自分たちがどうやって村の人々の力になれるか、真剣に考え始めている。ほとんどが20歳前後の、日本で言えば大学生の年代だった。たった4カ月間しか研修は受けなかったけど、既にいっばしの開発普及員としての自覚と基本姿勢を身に付けたようだ。

こんな彼女たちを見ると、こっちも頑張らなきゃなーと、日本の皆にも伝えなきゃなーと、思わず力が沸いてくる。（磯田 厚子）



▲定住した山岳民族の家

▼女性たちが中心となって井戸を掘る



▲普及員の若きホープ、カイリンさん

▼タイの農村を訪問した普及員たち



♠ ビエンチャンにずっといると、本当に死にそうになってくる。頭の固い役人たちとの会話、いつになったらできてくるのか分からない手紙の催促、そしていつまでもなくならないオフィスの書類。

そんな私を元気にしてくれるのが彼女たちだ。村へ行くと、きまって「私の家に寄って行ってよ」と言う。その一言だけで、ラオス中にこんなことを言ってくれる友だちがいる私はなんて果報者。よおし、この子のためなら一肌でもふた肌でも脱いでやろうじゃないの、という気になる。（北詰 秋乃）

♣ カンムアン県ブンアナー村で、井戸掘りトレーニング3日目のことだ。第一号の井戸から水が出た。老人も子供も、村中の人々が井戸を丸く取り囲んで、ポンプから汲み上げられる水を見ていた。一人のお婆さんが、ひしゃくを持って私のところへ来て、水を飲ませてくれという。その水を口にした彼女は言った。「なんて冷たくておいしい水なんでしょう！ みんなどうもありがとう！」

このことがあってから、私はその村に行くのが楽しみにになった。（タノンシー・ソーランケン）

ベトナム

今年になってベトナムのプロジェクトもようやく軌道に乗ってきた。ホーチミン市にも常駐に近い形でスタッフを置けるようになり、きめ細かい支援活動ができそうだ。

帰還難民の職業訓練

ハイフォン市での職業訓練プログラムは、中野さん、稲見さんが常駐して6カ月がたった。洋裁プログラム、電気修理プログラムの一期生も卒業し、徐々に軌道に乗り始めた。目玉の自動車・機械修理は、ガレージの建設から始めることになったので、時間がかかっている。それでもこの6月中には訓練で使用する主な建物も完成し、機械・設備のすえつけ、ベトナム人指導員の確保、訓練生の選考が終わり、いよいよ8月中には訓練が開始される。一方、木工・大工の訓練プログラムは、全体の忙しさの中で、残念ながら取り組みが遅れている。

3月から参加した稲見由美子さんは、主に職業訓練プログラムの会計を担当し、洋裁のプログラムや、91年から支援を始める予定の、ハイフォン市障害児童施設への訪問を行っている。

外国人の少ないハイフォン市の、私たちを受け入れてくれる労働局、職業訓練センターのスタッフもいろいろ苦勞が多いようだ。強い官僚主義の影響のもと、訓練教材などの輸入許可など活動に必要な各種許可を得るのもなかなか容易ではなく、私たち外国人の要望と、国内諸官庁の統制の壁の板ばさみにあうことが多い。またここ2、3年来、ハノイ市およびホーチミン市では問題にされていない一般市民との接触も、ここハイフォン市では実際上ブレーキがかけられている。長い間の外国勢力との戦いの歴史と、最近まではある種の「鎖国」状態にあったことを思えば、過度期としてやむを得ないのかもしれないが、若干息苦しい感がある。

スラムの支援活動

南のホーチミン市(旧サイゴン)では、昨年、都市スラムである第8区の社会福祉プログラムや、農村部ビン・チャン郡での保健医療活動などへの協力支援を行ってきた。年間を通じて複数のメンバーが6回現地を訪れ、活動内容向上のために話し合いを行ったが、常駐メンバーを持たない弱みで、率直に言って相互理解のレベルは低かった。言い替えれば、協力関係を真に深めることはできなかった。

6月中旬からは、新たにベトナムチームに参加した、久保英之さん、早恵さんが常駐に近い形でホーチミン市にすることができる。現地の人とのコンタクトもより綿密になるだろう。

プログラム内容としては、都市スラムでの社会福祉活動(特に社会的にハンディを負う子供たちの識字と職業訓練)、住民参加を中心とした生活排水システムなどの生活環境改善、農村部・漁村部での保健活動や植林など環境問題との取り組みが予定されている。

南北に長く隔たるベトナムで、歴史的にも異なるホーチミン市とハイフォン市。最も活気があり、外国人とのつきあいも苦にならないが、ホームレスの存在など社会秩序が大きく揺らいでいるホーチミン市と、政治的には最も保守的、閉鎖的といわれながら、ある種の落ち着きと社会的安定を感じさせるハイフォン市では、問題のあり方は大きく異なる。ベトナム社会とのつきあいも2年目になるが、学ばねばならないことは無限にありそうだ。

(熊岡 路矢)

♣暑い。蒸す。ホコリっぽい。三拍子そろったハイフォンの6月。火炎樹の咲く街角、朝夕は自転車とバイク、シクロの洪水をかき分けるようにして、行商のおばちゃんがノンをかぶり、天秤棒をかついで横切っていく。日中は暑くて人通りも途切れがちだ。私たちも道端のお茶屋で避暑。避暑。

意気込みすぎるタイプの私は、ハイフォンペースに慣れるまで、周りの人々に迷惑をかけたことと思います。現在、自分の新たな境地を開くべく修行中。

うまいもの。蟹味噌きしめん。海老ワントンメン。

半ゆで赤貝。蒸し春巻。アタリメ。中国製ビール。

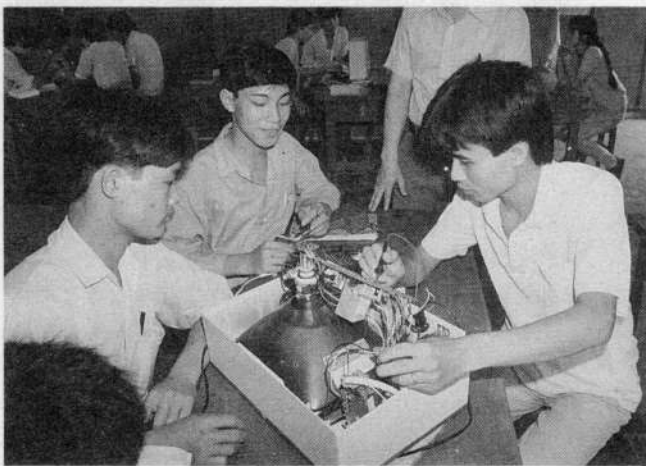
(稲見 圭)

♥6月に入り、2日連続羽アリの大発生に悩まされましたが、先日やっと解決しました。

市場では必ず話しかけられ、いつのまにか周りを取り囲まれていることもしばしばです。日本人が珍しいようで、時には髪の毛や腕を引っ張られることもあります。日本にない野菜も多く、どうやって料理するか考えるのが楽しみです。

この3カ月、経験したことのないことばかりの連

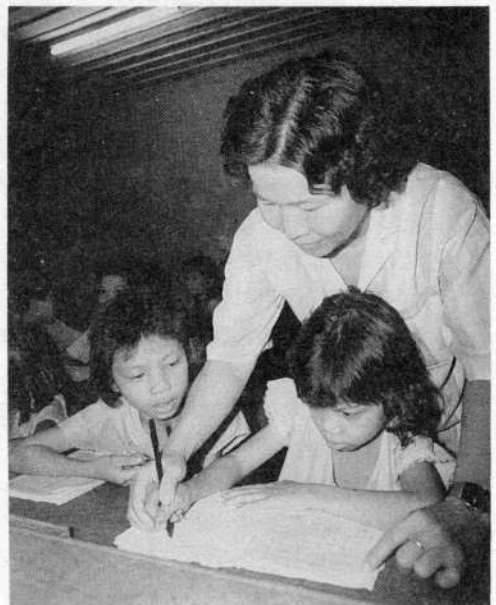
◀野菜を満載したシクロが通る



▲電気修理プログラムも軌道に乗り始めた

▶昼間働く子供たちのための識字教室

(写真提供) 毎日新聞社



続で、初めのころは戸惑いの日々でした。今では落ち着いて対処できるようになり、少し前進したようです。
(稲見由美子)

◆こんにちは！ ホーチミンにて購入した機材が着き、自動車コースを開く準備で忙しい日々です。

(中野 周二)

「ホーチミンでお腹をこわして以来、体調はかんばしくないようですが、大好物の蒸し赤貝を食べている中野さんが、3人の中で一番ハイフォンにとけ込んでいる気がします。」

(由美子談)

日本国内 定住難民

インドシナ難民が日本に定住し12年がたち、まわりの日本人の理解は深まってきたが、彼らの心の問題への取りくみはまだまだだ。彼らと日本社会がどうかかわっていくのか。このプロジェクトも転機を迎えている。

●定住難民が抱える“こころの問題”

4月13日横浜でシンポジウム「定住難民のこころを考える」(ブイ・ムアンさんを見守る会主催、JVC 神奈川後援)が開かれた。1987年2月、神奈川県秦野市で1人のカンボジア人男性が妻子4人を殺害するというショッキングな事件が起きた。この事件は多くの教訓を残したが、それまであまり大きく取り上げられることのなかった定住難民の精神衛生について、真剣に考えていこうというきっかけとなった。

このシンポジウムにアメリカ在住のカンボジア人で、定住難民の精神衛生に関わる専門家でもあるレイニー・ラングさんが招かれ、大変興味深いレポートを行った。レポートの内容もさることながら、ラングさんのような人の存在自体が大変な驚きであった。異文化の中で暮らすという点に関しては、日本とアメリカの定住者が置かれた立場は同じである。

レポートの中でアメリカの定住者が抱える様々な問題—家庭内暴力、親子の断絶、アルコール依存症、さらには精神障害等の事例が紹介されたが、これらはすべて日本の定住者に共通すると言ってもよい。しかし、日本の場合目に見える病気やけがならともかく、定住者のこころの問題に対する体制はまだ不十分である。ラングさんの勤める診療所には、ベトナム人のスタッフもいて二カ国語で対応できるという。新しくアメリカにきた定住者の家庭訪問や、問題を持った人のカウンセリングをしており、活動資金は全て州政府が出している。

一方現在日本の社会の中で、孤立して家に関じ込められた定住者は既かなりの数にのぼると思われる。事件にならなくても、何らかの形で追いつめられていく人は今後さらに増えていくであろう。早急な対応が必要とされる中で、ラングさんの報告は非常に示唆に富むものであった。

●定住難民自身の手によるプロジェクトを

現在神奈川県には約2700人のインドシナ難民が定住している。これは全国に定住している人の約3分の1にあたる。定住が始まって12年たって、難民に対する関心、理解も少しずつではあるが深まってきたようだ。定住者が多く住む県中央部の各地域では



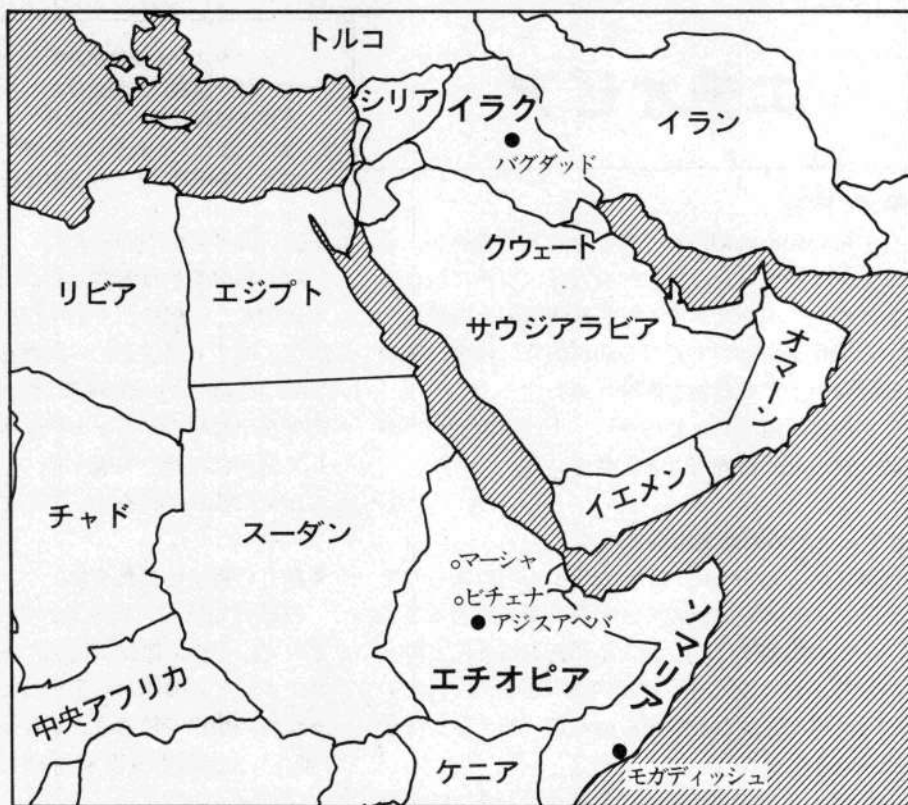
積極的に自分たちの文化を伝えるラオス人たち

たくさんのボランティア団体が生まれ、日本語教室を中心に活発な活動が展開されている。それ自体は大変良いことであるが、JVCも含めて活動が定着してきている今こそ、もう一度難民を支援することの意味を問い直す時期に来ていると思う。私たちが難民と関わっていく中で、常に心しなければならないのは、日本のことをよく知る者と知らない者という一方的な関係を作らないということである。これに気づかず“支援”を続けてしまうと、いつのまにか日本社会にとって有益な人間を育てることだけに精を出すということになる。

現在JVCの定住難民プロジェクトには、JVCの活動をよく理解して自主的に参加しているラオス、ベトナム、カンボジアの人たちが増えてきている。JVCと最も底辺に取り残された定住者をつなぎ、さらにそれぞれの持つすばらしい文化を私たちに伝える強力なカウンターパートでもある。例えば綾瀬市内で行われているラオス語教室はすべてラオス人ボランティアによって運営されている。今後こうした定住者の主体的な活動に対するサポートは積極的にやっていきたい。定住難民自身による定住難民プロジェクトが始まる日が待ち遠しいものである。

(岡本 達司)

アフリカ・中東では…



昨年12月、最後の日本人スタッフの磯田さん、船川夫妻は混乱のソマリアを後にした。難民救援の終了は予定していたものの、強盗に銃を突きつけられた末の撤退であった。磯田さんは語る。

「援助は問題の解決のためではなく、国際戦略に沿って開始された性格が強い。援助が大量難民を作り出したのではないかと。部族対立に拍車をかけ、国家の崩壊すら招いたともいえる」

ソマリアの経験が投げかけたものは大きい。圧倒的に生活状況の厳しいアフリカの人々は、植民地時代のみならず、今も援助という仮面をかぶった国際戦略によって深刻な影響を受け続けているのだ。今後、どこで、どんな問題に、どう関わるか？ まさに日本の市民としてのわれわれの選択が問われる時がきた。内戦により難民が出てきた、マスコミが書きたてるという理由だけで活動を始めるわけにはいかない。人々の生活をより不安定なものにすることに荷担する可能性すらあるからだ。

そうした意味で湾岸問題についての私たちの取り組みは慎重を極めた。武力と経済制裁の結果、押し出された難民だけに手を差し伸べるやり方に偽まんを感じた。そしてパレスチナ問題を含めて、中東の抱える本質的問題を熟慮したうえでイラク国内に柴

田、船川が入った。そこには水と食料の不足により伝染病流行を前にした市民が待っていた。しかし、イラク市民へのJVCの救援計画に対するマスコミと支援団体の反応は予想以上に冷たかった。

アフリカでは、エチオピアと南アフリカが焦点となる。エチオピアに関してはアジスアベバとスーダン、国境を隔てた両側で、市民グループ、政府、解放戦線各派、海外からのNGOなど多くの人々に会い、エチオピアの飢えの問題に今日本の市民として何ができるかを尋ねた。その結果、農村部の飢えの問題を外国人に任せきりにせず、自ら取り組みようと発足したエチオピアの市民グループの人たちと組んで、農村復興のプロジェクトを行う事を決めた。山田と15名のエチオピア人スタッフは混迷のアジスに踏みとどまり、その準備を進めている。

日本人の生活と関係の深いアパルトヘイトの南アフリカへも、NGOとして合法的に関われる時がきた。女性や子供の問題を中心に高梨が調査中である。

アフリカで活動が続けることは容易ではない。しかし、内戦や難民に惑わされず、冷静に事態を見すえ、じっくりと腰を落として取り掛かるならば、大地に根ざし生き延びようとする人々、われわれが組むべき人々の姿が見えてくる。(林 達雄)

エチオピア

●飢餓と内戦

今世紀の初めに40%あったといわれる森林が、今では2%に減少した。自然の破壊は、自然に依存する農民を追いつめた。また、長期間続いた内戦は、村から徴兵という形で若者を連れ去り、税金、穀物の強制買い上げで農村を疲弊させた。

今、最終局面を迎えた内戦は、干ばつ被災民への援助を遅らせ、被害を大きくしている。

●ビチェナでの緊急食糧援助

首都アジスアベバより北へ260kmの所にあるビチェナ県。エチオピア最大のタナ湖に源を発する青ナイル沿いの低地には、この7年間雨がほとんど降らなかった。標高2400mの高地から1500mの低地を望むと、点々と広がる集落の周りに、わずかな緑が眺められるにすぎない。

JVCは、低地の23カバレ（カバレは行政の単位）を最優先に配給活動を行った。累計14万5000人、1460トンの小麦と34トンの食用油が配られた。

配給所では、5歳以下の子供たちを対象に栄養状況がチェックされた。このときの測定結果はそれほどひどい状態ではなかったが、後にも行われた家庭訪問による調査で、多数の栄養失調児が見つかった。母親が外に連れ出すことを恥ずかしく思い、隠してしまったからだ。子供たちに対する粉ミルクの配給を開始するとともに、寸劇による栄養教育を行い、

♥連日エチオピアの報道がある。またアフリカ諸国の民主化の動きも伝えられている。経済的苦境のためとは言え、人々は口を開き、動き始めている。もちろん、それですべてがバラ色になるわけではない。彼らの前には、今までと何一つ変わらない荒れた大地での、出口の見えない長い道のりが待っている。

援助疲れが言われる中で、アフリカは忘れられようとしている。が、我々は一杯のコーヒーの向こうに、痩せた大地に立ちつくす「おっちゃん」を見る。我々は決してアフリカを見捨てるべきではない。

（寿賀 一仁）

メンギスツ大統領が辞任し、国外へ脱出したことで、17年間続いた独裁は終わりを告げた。しかし、首都を包囲している反政府ゲリラの動き次第では、状況は悪化しかねない。飢餓で苦しんでいる750万の人々の明日はどのようなのだろうか。

栄養状況の回復を図った。

村の将来を担う若者たちが、救援活動に様々な形で参加した。配給所での手伝いや村落調査、栄養や農業に関する講習会での討論を通じて、村の問題点を見つめ直した。農業では食べて行けないからと、高校を出た村のエリートが軍隊を目指す。飢餓に対して脆弱な村社会を強くしていくためにも、若者たちが村に残り、村をリードしていくことが必要だ。

●新しい夜明けのために

内戦の影響で、国連やNGOの活動が大幅に制限されている中、飢餓の解決に向けての新たな動きがエチオピア人の中から生まれてきた。都市に住む人々が村の現状を知ろうとしなかったことが農村での「飢え」を助長し、農村を貧しくしたと考えるグループだ。

内戦が、今後どの様に展開するかわからない現状で、より状況の厳しいエチオピア北部での活動は多くの困難が伴う。私たちは、この新しく起こってきた動きを支援するとともに、飢餓で苦しむ人々への迅速な対応ができるよう準備している。

（江原 浩昭）

♣「私にも小麦をちょうだいよ」「おばちゃん、どこからきたの」

「高地の〇〇村から」「あのね、この小麦は低地に住む人にしかあげられないの。ごめんね」

「私だって食べるものがないのよ。お腹がすいて死にそうなの。お願いだから小麦を分けて」

食糧配給。対象者を区分けするのはとても難しい。土下座され、靴にキスされそうになっても、確かに貧しいと思われる人に対してさえも、心を鬼にしなければならない。

（江原 広美）

イラク 湾岸被災民救援

湾岸戦争によって都市機能を痛めつけられたイラクでは、最も暑い季節を迎えて老人や子どもの健康が心配されている。汚れた水や食糧不足から腸チフスやコレラが全土に広がり始めた。

あれほど騒がれた湾岸戦争も、終わってしまえば遠い過去のように忘れ去られつつある。しかし、経済制裁が継続され、爆撃の直接被害にあったイラク市民の困難は戦後いよいよ厳しさを増してきた。水道が出ず、市民は汚染された水を飲み、さらに食料不足から体力が落ち、病気への抵抗力を失って、イラク全土に腸チフスやコレラが蔓延し始めた。ICRC（赤十字国際委員会）は各国に緊急援助を訴えている。

●新しいタイプの戦争

1990年8月2日のイラクのクウェート侵攻に対し、国連決議により各国がイラクへの経済制裁を開始。イラクは、食料、医薬品、生活必需品の不足に陥った。

1991年1月17日、湾岸戦争開始。多国籍軍はイラク国内の発電所、電信電話局、郵便局、橋、石油精製所、軍事施設、各種工場などを爆撃し、都市生活を維持するための基幹施設に壊滅的打撃を与えた。

1991年2月28日、戦争終決。その後、イラク南部ではイスラム教シーア派の反政府運動が活発化。それに対し、政府軍が徹底的に攻撃を加え、一説には死者数千人にのぼったと言う。南部のナジャフ、カルバラ、ヘラなどの町は内戦で荒廃した。さらに北部では100万人を越えるクルド人が難民となってト

ルコ、イラン、シリアへ逃げた。

こうした過程を経て、イラク市民は真綿で首を絞められるようにじわじわと痛め付けられている。特に気温40～50度に達する9月までの夏をどう越すかがポイントとなっている。

●JVCの活動

JVCは、3月から毎月バグダッドにスタッフを派遣して、現地調査を進めるとともに救援活動も開始した。まず、5月には食糧26.2トン北部のクルド人居住区、アルビルとスレイマニアへ送った。6月現在、神奈川県との協力により、水道技術者2名とスタッフ1名をバグダッドに派遣している。さらに医師2名とスタッフ1名が医薬品をもって南部のバスラへ行き、病院などを視察する予定である。

今後、医薬品、医療器具、食糧援助を中心に活動していく。そしてこの夏を乗り切り、緊急状況を脱した時点でJVCとしては手を引きたいと考えている。

また、湾岸戦争を引き起こした国際的なしくみそのものも、問わなければならない。国際社会は一方で難民、被災民を生み出し、一方で救援活動を行う。この矛盾をどのように乗り越えていったらいいのか。イラクの活動が終っても、私たちは引き続きパレスチナを含めた中東地域に関心を持っていきたい。

（柴田 久史）



▲ 26.2トンの食糧はクルド人居住区に届けられた

環境プロジェクト

かつては森林だったのに、今でははげ山になってしまった、タイ国チャイブーン、ベチャブーン、ピサヌロークの3県15カ村にまたがって、植林と単一栽培に代わる複合経営農業の普及につとめている。

●農民の組織化

JVCのメンバーになりたいと希望する農民は、誰でもメンバーになることができる。メンバーになれば、集会、講習会、スタディーツアーなどに参加することができ、植林・農業活動のために種や苗を借りることができる。各村で、植林農業の意味をよく理解する人を核に、グループを作っている。このグループは、植物性農薬の材料集め、生産した野菜の出荷などの活動単位となる。

●無農薬野菜栽培

水の得やすい谷あいの地域で、家族単位であるいはグループで野菜栽培を進めている。野菜は約3カ月で収穫できるので、その収入は資本をもたない農民の苗、陸稲の種などの購入代として利用する。

●植物性農薬

インドセンダン、ツツラフジ、ナンキョウ、香水ガヤなど、野生、あるいは栽培している香りの強い植物、約10種をすりつぶして水を加えると植物性の農薬となる。この農薬は野菜、稲、樹木のほとんどの病虫害にきく。しかし、虫によっては効力に永続性がないので、ひんぱんに散布する必要があるものもある。基本となる植物は3種類ぐらいだが、さらにその土地の植物を加えて、農民が自分で作ることができる。これらは食用、薬用植物なので、人体には全く害がない。

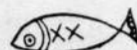
●複合経営農業・植林

このあたりは比較的傾斜のゆるやかな山岳地帯であるが、現在は山頂までトウモロコシ栽培のため丸裸にされている。JVCの計画では、山頂周辺は水源地保護、土壌流出保護のために森林を再生し、中腹には等高線状に早生樹を植えて土壌の流出を防ぎながら、階段状になった土地に穀物、米、果樹、スパイスなどを植え、ふもと、谷あいには野菜を植えるようにする。

また、村の共有の土地には、共有林を作る。各JVCのメンバーがそれぞれの地域の種を集め、これをJVCの植林農業センターで苗にし、配布するとともに、農民の間でも機会あるごとに種の交換をはかるようにしている。

●畜産・養魚

さまざまな植物を混植する複合経営農業は、家畜を飼うことによってさらに生態系を豊かなものとする。資金がないため家畜を買うことのできない農家には、JVCの家畜銀行から親豚、鶏、アヒルなどを貸し、仔が生まれたらJVCに返していく。くず野菜、ヌカ、バナナの茎などで飼育した家畜のフンは、肥料、魚の餌などにする。また、畑の一角に手掘りで作る魚の養殖池は、乾期の水源になるなど多目的に利用できる。

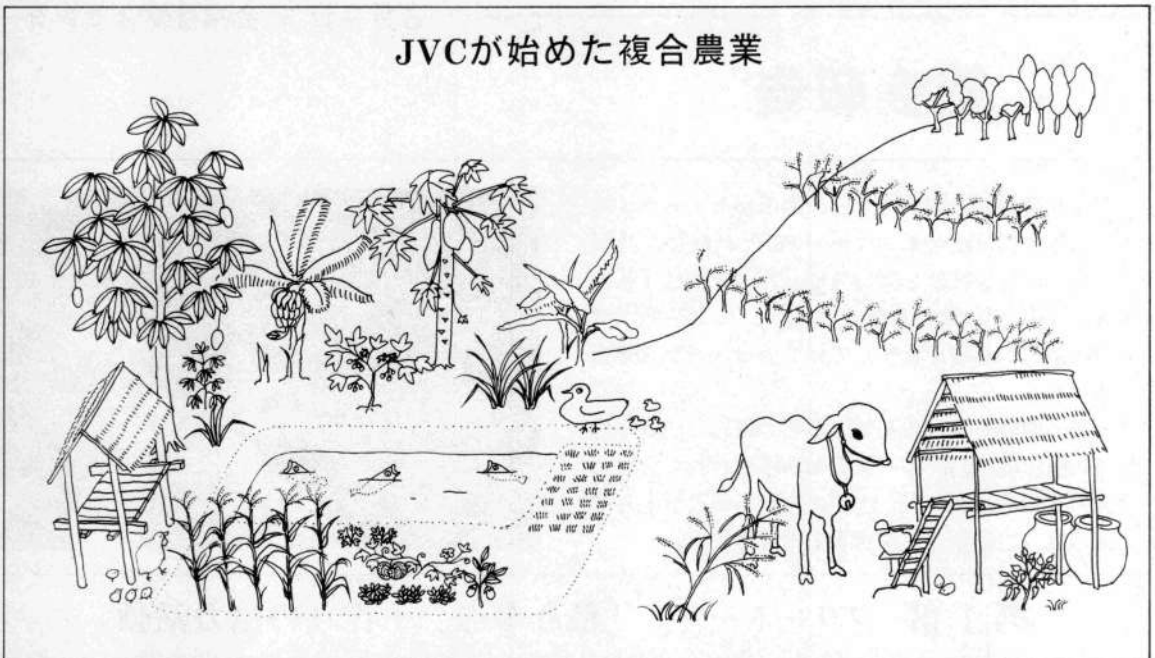


♥待ちに待った雨期がきた。毎日植林で忙しい。あんなにたくさんの種を集めてきたのに、あんなにたくさんのビニールの袋に土を詰めて苗を育てたのに、あつというまに足りなくなってしまった。

1年で最も暑いこの季節、太陽の下で汗を流したあと、夜はほとんど毎日のように村で集会がある。いまでは木もほとんど生えていない、共有林とは名ばかりの土地に、そしてみんなの畑にどう植林するか話し合うための集会だ。緑が広がる！ 本当に楽しみだ。
(チャレム・ケオチョーホー)

◆僕が都会暮らしに見切りをつけ、農民となったのはずいぶん昔のことだ。それからずっと農民として生きてきた。古い友だち、コメンの薦めで、3年前からは農薬と化学肥料を使うことをいっさいやめた。有機肥料、有機農業の成果は上々で、一帯の水田がズイ虫で全滅してしまった昨年も、僕の田んぼでは豊かな収穫があった。昨年からは、コメンに誘われてJVCに参加した。自分だけではなく、おおぜいの農民と環境回復、森林再生に、取り組めるのはとても嬉しい。
(ブラシット・インソー)

JVCが始めた複合農業



● 農民の視察・研修

化学肥料や農薬を多量に投入しながら輸出用の単一作物を作る農業から、日々の食料を自給し、余剰を売る農業に転換するためには、まず実施されている農業を見て、自分で考えることが大切である。

JVCは、農民対象のスタディーツアーを農閑期を中心に実施しており、森林農業をやっている農家、等高線農業をやっている農家、複合経営農業を推進している村、村の共同林を守っている村などを訪問して、既存の農業から新しい農業への転換の方法、推進の技術など具体的な討論を重ねる機会を設けている。

● 国際会議

現在、タイでは700万所帯の農家のうち、約2%の14万所帯の農民が複合経営農業に取り組んでいる。

取り組むきっかけは、借金、土壤疲弊、飢えなどであり、転換した人たちは一様に、借金がなくなった、土壤が豊かになった、食べるものが豊富になり、現金収入も増えたと満足感を示している。しかし、今までの価値観から逃れにくい大多数の人たちにまで複合経営農業が波及するには、さらに時間が必要だ。また、成功の秘訣は、急がず焦らず少しずつ進めることにあるようだ。

このような各地の取り組みを数多く見る機会のあるNGOの役割は、彼らの取り組みを互いに紹介し、交換することにある。それぞれの経験を交換すれば、一つひとつの取り組みはさらに多角的なものへと深まっていく。このため、地域を越え、国を越えて経験の交流ができるよう、国際的なセミナー、ワークショップ、スタディーツアーなどを行っている。

(岩崎美佐子)

♠一面の禿山に、まず鳥が好きな実のなる木を植えよう。そうすれば鳥がたくさん戻ってきて、植林を手伝ってくれるだろう。

僕が小さい頃、森はありふれたものだった。あれから数十年、いまや森は跡形もない。鳥、鹿や象たちも消えた。共に地球を作ってきた他の生物を虐待し、人間だけがいつまでものさばってはいられない。もう一度、森を取り戻そう。難しいかどうか？ 森を取り戻さなくては、僕の未来も地球の未来もない。

(コメン・スンスマン)

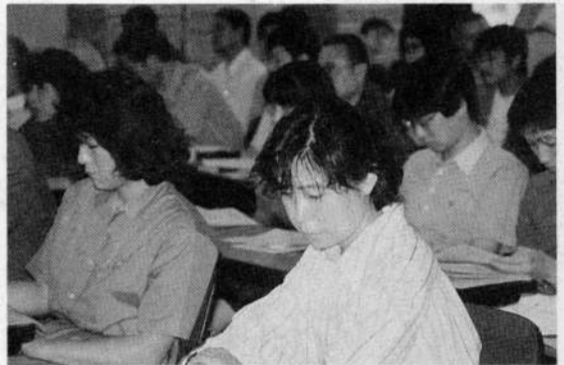
♣トウモロコシを植える季節がやってきた。この半年、商品作物を栽培する生活から脱皮しようと話し合ってきた農民も、大半は、昨年同様トウモロコシの播種に忙しい。でも僕たちは気にしない。生活全部を突然変えられる農民なんて数人しかいないからだ。そんな彼らも畑の一部は植林のためにとってある。そしてトウモロコシの播種が終わったら、植林を始めた！自分で育てた苗を植え尽くし、もっともっと苗を欲しがっている。僕たちも負けてはいられない。

(カセムサン・シーワッタナー)

総会報告

第8回会員総会が6月9日、飯田橋セントラルプラザの社会福祉総合センター(注)で行われた。昨年と同様午前と午後の2部に分けられ、午前は「私も参加、手作りの協力活動」と題し、山形や新潟でJVCの海外の活動を支援している会員の方から発表があった。

午後の総会では、1990年度の活動報告・決算報告及び1991年度活動計画・予算案が承認された。また役員の変更も行われた。上記の方々が新役員として承認され、岩崎駿介氏が代表に再選された。



第1部 フリートーク 「私も参加、手作りの協力活動」

第1部では山形でタイのカオイダンのプログラムを支援している桑山紀彦さんと、バザーなどを通じてラオスのプログラムを支援している新潟ボランティアセンター(NVC)の大野和枝さんの発表があり、地方で活動することの意味とその方法について話し合われた。

私たちは海外の現場で活動を続けてきたが、しだいに海外の問題は私たちの問題と深く結びついていくことがわかってきた。日本の問題の答えを求めて海外へ行く。東京を飛びこえてそういう動きが生まれつつある。

桑山 日本の地方が死んでいきます。自信を回復するのは難しい。しかしJVCのカオイダンのプロジェクトにかかわることで、地方についても海を飛びこえられることがわかりました。

JVCには情報を提供してほしいと思います。東京にお金を集め、それを海外に送るのではなく、直接海外につなぎたい。カオイダンに「山形ニッサン」から車を送ったのはその始まりです。放送局も自局制作をあきらめています。今回はJVCに関連した番組を製作し、反響がありました。

JVCは東京の団体のような感じがしません。地方にいたままで参加できます。我々の自信回復のサポートをしてほしいですね。9月にはカオイダンへのスタディーツアーに14人が参加します。ことわるの

に大変なほど反響が大きかったです。

大野 谷山さんが大学でいい話をしてくださって、学生たちがラオスのために何かやろうと立ち上がったのが新潟での活動の始まりです。その時からやっている愛のかけ橋バザーも、今年で3年目です。マスコミが取り上げ、ラオスを知らない人もしだいに関心を持ってくれています。

私は昨年のスタディーツアーに参加したのが最初です。ツアーに参加して、初めてこれまで話に聞いていたことが実感できました。特に女性の方たちとは、難民の人もスラムの人も同じように子育てをしているので、女性同士共感するものがありました。

スタディーツアーから帰っては報告会をあちこちで開いたり、本も作りました。地方からも直接現場に出てみようと思います。今年は親子で行くスタディーツアーを計画しています。将来はNVCからボランティアを派遣したいと思っています。

穂坂 アジアのスラムに関連するNGOのネットワーク作りをしています。ホーチミン市などNGOのない所には、自分たちでしかけています。

欧米のNGOの援助システムは型がすでにでき上がっていて、NGOもプロフェッショナルとして第三世界に出ている。しかし私としてはそうでなくて、もっとフラフラした動きでいいと思います。タイのスラムのリーダーがベトナムに行く。またベトナムからタイやインドに行く。そのような人の動きの中

(注) 総会の会場を東京都婦人情報センターと御案内してしまい、皆様にご迷惑をおかけいたしました。申しわけありませんでした。

JVCの新役員

執行委員

秋山忠正：「(社)協力隊を育てる会」常任理事
足立房夫：日産労連専務理事
岩崎駿介(代表)：筑波大学助教授
江橋 崇：法政大学教授
勝保 誠：明治学院大学助教授
熊岡路矢：JVC事務局、JVC副代表
須田春海：市民運動全国センター
多賀秀敏：新潟大学教授
中佐 保：外科医、SHARE事務局長
西川 潤：早稲田大学教授

野中章弘：フォトジャーナリスト
アイネス・バスカビル：元RIJ募金担当
林 達雄：JVC事務局長
星野昌子：JVC特別顧問
横山純子：グローバル市民基金「地球の木」代表
監査委員
羽鳥徹夫：弁護士
鷺津邦男：(財)モラロジー研究所経理部長
顧問
栗野 鳳：日本ユネスコ協会連盟理事

ら新しいダイナミズムが生まれるのではないのでしょうか。それを北側のNGOが支えるというのがいいのではないかと思います。

岩崎 “JVCの支部”という言葉が使われますが、「自分たちでやったらどうですか」と言いたくなります。主体的にやっていくことが重要です。東京継由にしない方がいいでしょう。もちろん東京の事務所を通じて便宜をはかってもらうことはできます。

日本の地域と第三世界をつなぐといっても、何のテーマでつなぐのかが重要です。かわいそうだから行くのではない。自分たちの生活なりを改善しながら、向こうとつないでいくという方が将来性があると思います。

池島 一時帰国して奄美大島の実家に帰ったら、ゴルフ場建設の話が持ち上がっていました。村長さんによれば、村を活性化するには企業誘致しかない

というのです。自分たちで個性的な村作りをするのではなく、外から人が来るのを待っているだけです。そこでタイで積極的に村作りをやっている人と村の人をつないだら、村の人の価値観も変わるのではないかと思います。私がそのつなぎ役になれないかなど。日本がタイに協力するばかりでなく、タイの人にも日本に協力してほしいのです。

桑山 地方にあったものが一方向に流れて、失われてしまいました。昔のような循環の世界に戻れば生き返ることができます。第三世界に行って循環した世界が見たいのです。

井本夫妻が山形に来たことで、ずいぶんインパクトがありました。スライドでカオイダンのことを説明する井本さんの側で、美奈さんが泣いている円ちゃんをあやす。そんなことでJVCの個々人の生き方と自分たちがつながっていると感じました。

第2部 会員総会

昨年と同様90人あまりの出席者があり、今年は熟年層の参加が目立った。学生と主婦によって作られたJVCも少しずつ日本社会に根づいているようだ。

昨年度の活動に関しては、ベトナムで開始されたことにより、インドシナ難民の流出国すべてで活動することになったこと、タイとラオスの農民同士の交流、カンボジアからインドへのスタディーツアーなど南の人々同士のネットワーク作りが進んでいること、その一方でアフリカでの活動は、内戦などの影響で停滞していることなどが報告された。

質疑応答では、執行委員会で話されている内容を

知らせてほしい、執行委員会で会員の意見を反映してほしいとの意見が出され、事務局、執行委員会がそれらの要望に応えるよう努力することが約束された。

また、事務局からは、内容があいまいな活動者会員を廃止したいとの提案があり、承認された。したがって会費切れになった方から、順次一般会員が購読者になっていただくことになる。なお、事務局及び海外の現場で働くスタッフも一般会員となる。

(会員の方には、総会の議事録をお送りいたします)

JVCってどういうところ？

—オリエンテーションでの御質問に答えて—

JVC東京オフィスでは、毎月第1月曜日の午後6時からと、第2、第4土曜日の午後2時からJVCの活動について説明会(オリエンテーション)を行っています。毎回10人前後の方が集まりますが、ほとんどが東京の近くの方です。なかなか移動説明会もできませんので、今回は誌上説明会でご質問にお答えいたします。

Q 海外でボランティア活動をしたいのですが、JVCではスタッフを公募していますか。また、海外で働くにはどんな資格がいりますか。

A JVCでは海外で働くスタッフを定期的に公募することはありません。プロジェクトが拡大したり、スタッフの交代する時に、随時機関誌や新聞、専門誌などで公募しています。

JVCの活動現場では自動車修理・機械技術者、看護婦、助産婦、日本語教師などの専門家が働いていますが、そのような特別の資格がない人も大ぜいいます。NGOの活動では、全体を見通すことのできる人、柔軟に行動できる人が重要視されます。もちろん専門家にもそのような資質が求められます。JVCでは特別な資格を必ずしも要求していません。

Q 今高校生です。将来NGOで働きたいと思っています。どんな勉強をしたらいいですか。

A 現在JVCで働いている人を見てもわかるように、それぞれがいろいろな経歴を持っています。南北問題の本を読んだり、語学を学んだりすることも重要ですが、NGOの活動に参加していくうちに、何を学んだらいいのか見えてくると思います。

Q 私は海外での活動はできません。国内では何ができるでしょうか。

A 東京オフィスでは海外の各プロジェクトを支援するグループがあります。現場の報告をまとめてニュースレターを作ったり、キャンペーン活動を行っています。それぞれ毎週1回決められた曜日に集まっていますので、詳しくは東京オフィスまでお問い合わせ下さい。

また、JVC神奈川ではインドシナ難民の人々の家庭を訪問し、日本語を教えたり生活相談をするボランティアになったり、彼らとの交流会やバザーに参

加することができます。このような定住難民プロジェクトはJVC神奈川事務所(045-671-7082)がコーディネートしています。

総会報告をご覧になってもおわかりのように、新潟や山形でJVCを支援するグループが生まれています。JVCは会員制をとっていますが、支部はありません。独自にイベントや勉強会の企画を立てて下さい。パネルやビデオなどは常時貸し出しています。

JVCはこれまで海外の活動に力を入れてきました。しかし、第三世界の問題を解決するには私たち自身の生き方を変えなければいけないということに気がつきました。地域の中でいったい何ができるか、私たちも模索中です。

—中学生からはこんな質問がありました。

Q ボランティアをしていて生活するお金はどうするのですか。

A JVCでは“ボランティア”を“自発的な意志をもって責任ある行動をとる”という意味で使っています。これまでJVCに1000人以上のボランティアが参加しましたが、そのほとんどはインドシナ難民救援にかかわった若者たちです。彼らは自費で参加しました。もちろん無給でした。しかし現在では、JVCのスタッフにはそれぞれの国に応じた生活費が支給されています。また仕事として契約するので、最低1年以上は働く必要があります。

Q 自分では何の得にもならないのに、なぜボランティアをするのですか。

A JVCは海外で救援活動や開発協力を行っています。そこに住む人々だけの問題としてはとらえていません。問題は第三世界にのみあるのではないのです。

たとえば、難民や避難民は主に政治的原因や内戦などで大量に流出しますが、その原因をたどると当事国以外の国際政治のしくみに行き当たります。そして、そのしくみを荷なっているのが私たち自身でもあることに気づきます。このようなしくみは日本にいてだけではなかなか見えてきません。私たちは海外で活動することによって、そのようなしくみを体験することができました。

東京グリーンウォーク'91 大成功!!

⑩ポイントでは
インドネシアのおめん
をかぶったスタンパーが
お出迎え。

いらっしやい

はっきり
いて、こわい

5月26日(日)、すばらしい晴天の中、第6回東京
グリーンウォークが行われました。約900人の参加
者が、江戸川沿いを歩き、ゴールの水元公園へ。途
中、第三世界を体験できるいろいろなイベントがあ
りました。そして、ゴールでは参加者全員に苗木が
プレゼントされました。

バードウォチ
ングも楽しめる
緑いっぱい
の公園だよ!



ゴールの野外ステージでは
コンサートや、アジアの民族
衣装のファッションショーが
ひらかれた。

⑧ポイントの青年の家では、
JVCを含めたNGOsの展示
会場となった。



JVCの名コック
尾関さんのむしパンも
売ってたヨロ

③④ポイント間は
バングラのリキシャが
走る!!



シャアラニールの
お兄さん、バングラの
ためなら百人カ!

ニヤンダ?



②ポイントは
土手を利用して
草すべり

江

戸

川

駅

江

戸

川

駅

④ポイントでは、
エチオピア台所モデルと
大好評の水運び。



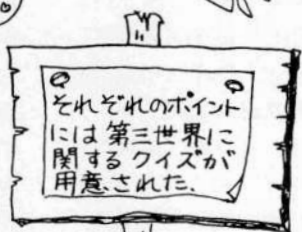
けっ
きつい



③ポイントでは
沖縄特産フルー
ジュースのサー
ビス



うん
おいしい



Akiko

新しく会員になった方々

1990.4~1991.3

1990年度に新しくJVC会員になられた方は341名です。1991年3月31日現在で、JVCの会員は1077名になります。内訳は一般会員 750名、学生会員 196名、活動者会員 104名、団体会員 15名、賛助会員 12名です。なお賛助会員は、昨年度の総会以降廃止されることになりました。

一般会員

〔4月〕

川俣 芳衛 (新潟県)	坂口香保里 (東京都)	粟生 ヨミ (東京都)	桃井 義博 (愛知県)
山崎 春彦 (神奈川県)	百本 敏昭 (岡山県)	石崎百合子 (")	野間 光子 (鹿児島県)
古口 牧子 (千葉県)	永田 朝路 (東京都)	平山 利子 (福島県)	相原 正二 (宮城県)
立岡 浩 (埼玉県)	向田 映子 (神奈川県)	〔9月〕	相原みつ子 (")
丸一 欣也 (東京都)	山中 秀峰 (東京都)	渡辺 孝明 (東京都)	金子 信夫 (東京都)
南 正子 (大阪府)	福原 秀美 (")	高橋 正樹 (")	飯島文太郎 (宮城県)
和田まこと (神奈川県)	武藤 定子 (神奈川県)	進元 恵子 (兵庫県)	原 庸子 (神奈川県)
有福 孝徳 (東京都)	森本 深雪 (")	犬飼 講平 (茨城県)	斉藤くに子 (茨城県)
林 美栄子 (")	小野 浩 (茨城県)	須藤 宏子 (")	大川 郁子 (青森県)
清水愛里子 (京都府)	比留間幸栄 (北海道)	小林ゆかり (愛知県)	三浦 公子 (茨城県)
鈴木 勲 (静岡県)	浅井富美子 (神奈川県)	〔10月〕	青木みつ子 (千葉県)
長谷川まり (埼玉県)	大塚 紀子 (秋田県)	土屋 久男 (東京都)	桧垣 寿志 (")
岩田 真理 (東京都)	小川 英子 (東京都)	桜井 幸子 (千葉県)	黒坂三和子 (神奈川県)
石澤 純 (")	高橋 貴子 (千葉県)	村上 淳子 (愛媛県)	川嶋かほる (埼玉県)
吉田 幸子 (")	浅賀裕美子 (東京都)	小林 基男 (東京都)	飯島 光孝 (神奈川県)
嶋田 寛子 (長崎県)	加藤 尚子 (")	小山吉志子 (")	常慶 晶子 (東京都)
熊木 照衍 (千葉県)	日高 栄子 (大阪府)	小坂 明美 (")	信原 孝子 (兵庫県)
市ヶ谷文子 (埼玉県)	〔7月〕	竹内 勲 (長野県)	河村 正 (埼玉県)
小林 庄平 (栃木県)	岡 ゆき子 (東京都)	宮川 真木 (北海道)	小口千寿子 (東京都)
祖谷登希雄 (京都府)	小結 明子 (")	宮下 保夫 (埼玉県)	市岡 康子 (")
中川 忠幸 (岡山県)	山瀬 知恵 (神奈川県)	桜井 健二 (北海道)	佐藤 春樹 (")
谷口 平登 (福井県)	菊池みやこ (")	小島 国夫 (茨城県)	野村久美雄 (埼玉県)
吉谷 敏 (福岡県)	喜多川愛子 (東京都)	薄井久美子 (埼玉県)	星野 昌嗣 (")
〔5月〕	東 誠 (神奈川県)	竹内 千佳 (岡山県)	佐々木英之 (東京都)
藤本 秀幸 (島根県)	川崎 毅 (東京都)	山田 好次 (神奈川県)	〔1月〕
古川 功 (埼玉県)	尾関 葉子 (")	上野 宏之 (東京都)	斉藤 紀子 (鹿児島県)
鈴木 邦枝 (東京都)	平川 孝一 (神奈川県)	大池ひとみ (神奈川県)	稲田 俊生 (神奈川県)
長野 広美 (千葉県)	河戸 弘之 (広島県)	〔11月〕	大日方涼子 (東京都)
高谷 静子 (東京都)	〔8月〕	下村 暢子 (鹿児島県)	鈴木 篤志 (岐阜県)
山口 祐子 (静岡県)	斎藤 裕子 (東京都)	手塚真由美 (埼玉県)	青木 美樹 (長野県)
青木 昭子 (千葉県)	伊藤 和枝 (")	斉藤千恵子 (東京都)	藤堂祐史郎 (愛媛県)
阿久津和弘 (")	水迫 道子 (神奈川県)	小井口 有 (岩手県)	浜本 勝利 (広島県)
上村 隆 (東京都)	島崎 純一 (東京都)	佐々木三千弘 (大阪府)	杉田 恵子 (千葉県)
川上 和男 (神奈川県)	中里菜穂子 (千葉県)	黒澤 邦子 (東京都)	保澤 道子 (東京都)
片桐 牧子 (北海道)	沢田 順二 (神奈川県)	〔12月〕	荒木田百合 (神奈川県)
〔6月〕	井桁 早苗 (埼玉県)	藤沼 想 (茨城県)	森山 治樹 (千葉県)
荻野 洋子 (東京都)	千賀 恵 (神奈川県)	好富 寿子 (東京都)	森本 和男 (")
	松木 千枝 (東京都)	中川 英明 (タイ)	野見山智子 (東京都)

功刀 達朗 (東京都)	柿坂 律子 (埼玉県)	第2報道部 (大阪府)	五十嵐優樹 (宮城県)
畑中 宏子 (京都府)	広瀬 英子 (京都府)	稲見 芳治 (埼玉県)	秋山隆志郎 (東京都)
前田 裕資 (")	渡辺由美子 (東京都)	寄立 三郎 (東京都)	森瀬 英二 (大阪府)
橋本 道夫 (神奈川県)	唐沢 和代 (")	中村美智子 (長野県)	安宅 則夫 (神奈川県)
吉田勇次郎 (富山県)	川瀬美貴子 (愛知県)	林原 千晶 (静岡県)	[3月]
峯村 主 (静岡県)	榎木 孝明 (東京都)	中川 泰夫 (大阪府)	村山 伸子 (東京都)
宮澤 好 (神奈川県)	笹目 礼子 (茨城県)	杉浦 好孝 (神奈川県)	加畑 義人 (")
遠藤 和仁 (京都府)	鈴木久美子 (神奈川県)	小林 仁 (")	本間 芳子 (大阪府)
青野しげ子 (東京都)	桑本 明枝 (大阪府)	石垣真知子 (")	武部 洋子 (東京都)
大谷 信盛 (アメリカ)	佐川 久恵 (北海道)	小林 拓 (")	桜小路光紀 (埼玉県)
高橋 敬三 (兵庫県)	絹谷 政恵 (愛媛県)	平岩 宣仁 (栃木県)	井上 欣彦 (京都府)
石倉 克真 (神奈川県)	山本より子 (兵庫県)	和田 充啓 (埼玉県)	木川 博子 (神奈川県)
柳沢 伸子 (東京都)	高見 チェ (東京都)	大橋ふじこ (東京都)	吉田 康子 (神奈川県)
栗田 道子 (")	[2月]	佐々木真理 (神奈川県)	日比野光子 (茨城県)
新垣 修 (")	碓井兵之助 (兵庫県)	亀田 正人 (北海道)	安永 豊 (山梨県)
山本 照通 (静岡県)	石田 英子 (宮城県)	深本悦三郎 (広島県)	福島 慶子 (福岡県)
田中 治 (東京都)	安 富美子 (大阪府)	瀬戸千恵子 (神奈川県)	石原 肇 (千葉県)
辻 廣子 (千葉県)	石場 幸雄 (東京都)	池谷 誓子 (静岡県)	平岡 實 (埼玉県)
長崎 正躬 (東京都)	濱田まゆみ (愛知県)	鈴木 智子 (埼玉県)	伊多波洋子 (東京都)
宮森千嘉子 (神奈川県)	池澤 夏樹 (東京都)	小堀 和子 (埼玉県)	相澤 邦雄 (")
赤堀 英明 (東京都)	久津輪 雅 (茨城県)	丸山多摩子 (東京都)	
尾園美智弥 (")	関西テレビ放送報道局	森本 栄二 (愛媛県)	

学生会員

[4月]	[6月]	堀田 聡美 (東京都)	神谷 直子 (東京都)
金山めなみ (神奈川県)	二宮 伸之 (神奈川県)	[10月]	後藤 英樹 (")
藤田 順子 (鳥取県)	須田紀久身 (東京都)	村松 康彦 (三重県)	[12月]
田村 豊 (埼玉県)	茅野 ゆり (茨城県)	高田 章 (北海道)	間 晶子 (大分県)
秋吉 恵 (北海道)	岩澤 保博 (東京都)	勝又亜希子 (静岡県)	林 尚恒 (神奈川県)
秋山 智子 (茨城県)	若杉 和代 (")	赤井佐和子 (京都府)	小澤 京子 (愛知県)
森 千代子 (東京都)	萱野 智篤 (北海道)	益満みちの (千葉県)	中森加奈子 (奈良県)
杉山 聡 (")	[7月]	山口ひとみ (静岡県)	橋本 裕美 (石川県)
山畑 匡 (")	浅川 クミ (東京都)	(シザド・ダシュネスタン)	橋本 志子 (兵庫県)
中野 弘之 (")	瀬上 智晴 (兵庫県)	(神奈川県)	[1月]
鈴木 康郎 (茨城県)	大山 昌子 (")	石川 徹也 (富山県)	小杉 寿文 (茨城県)
二宮 功 (愛媛県)	岩倉 茂治 (愛知県)	古山 隆之 (東京都)	森 依子 (神奈川県)
[5月]	原田 徹 (愛媛県)	仲 厚 (千葉県)	金子るり子 (千葉県)
望月 明子 (長野県)	[8月]	山田とし子 (")	白井 良邦 (神奈川県)
吉岡 高子 (神奈川県)	牛山 裕美 (愛知県)	[11月]	遠藤亜貴子 (東京都)
勝間 靖 (兵庫県)	中村 修 (福岡県)	村田 友花 (京都府)	岡本 直大 (神奈川県)
関谷 和美 (東京都)	内山 真紀 (新潟県)	皿海 順子 (愛知県)	本間 周子 (東京都)
上野 文 (")	[9月]	植西 香織 (京都府)	[2月]
小林 夏樹 (")	泉 道子 (神奈川県)	米倉 雪子 (東京都)	佐久間直樹 (東京都)
経田 寛 (長野県)	泉 一雄 (")	林 泰子 (京都府)	高野 紫 (宮城県)
	金成 邦子 (")	木村 州一 (埼玉県)	宮原志津子 (東京都)

遠藤 浩一 (愛知県)	大湊 享 (静岡県)	田中祥太郎 (岩手県)	宮本めぐみ (神奈川県)
林 暁子 (埼玉県)	友野 順章 (神奈川県)	曾根 享一 (山梨県)	鶴沢 詩 (千葉県)
中西 淳一 (愛知県)	猪熊比呂子 (静岡県)	田森三佳子 (東京都)	大井 英臣 (")
竹内 歩 (東京都)	岩本 隆 (埼玉県)	萩野 聡 (")	前田 万里 (沖縄県)
池田美由紀 (千葉県)	白石 智子 (")	西見 大成 (福岡県)	杉浦あずさ (愛知県)
大塚 健司 (茨城県)	佐藤 亜弥 (東京都)	[3月]	横井 陽子 (千葉県)
古頭 岳夫 (東京都)	受田 宏之 (埼玉県)	八重樫 泉 (千葉県)	外岡みお子 (神奈川県)
金浦 東祐 (")	山川有喜子 (愛知県)	宮崎 裕二 (東京都)	

活動者会員

[4月]	[6月]	[9月]	[1月]
只松 祐子 (埼玉県)	中川 春野 (ベトナム)	酒井 昌史 (千葉県)	蛭原 知子 (神奈川県)
山内由紀子 (神奈川県)	Dr. Narendra	藤崎 智子 (香港)	福田 智彰 (")
小野 豪大 (")	(カンボジア)	[10月]	[2月]
船川 秀夫 (埼玉県)	[8月]	竹井 潤子 (カンボジア)	丸山 知香 (神奈川県)
[5月]	富田 和子 (千葉県)	大西 睦美 (東京都)	[3月]
泉 裕美 (滋賀県)	稲見 圭 (埼玉県)	[12月]	馬渡 秀嘉 (佐賀県)
		大槻 和弘 (千葉県)	

団体会員

[4月]	[1月]
真 浄 寺 (東京都)	シンカイビル (東京都)
[9月]	[2月]
曹洞宗宗務庁 (東京都)	システム創研 (東京都)

賛助会員

[4月]	[5月]
粕谷香代子 (京都府)	木村 保子 (広島県)
土岐 可津 (千葉県)	有光 裕子 (兵庫県)
(敬称は略させていただきます)	



湯島ホッとらいん

サワッディーカ

สวัสดีค่ะ

先日総会のため、タイから代表のポンピモンさんとソムヨットさんが来日した。日光のゴルフ場建設予定地に足を運んだり、支援団体を訪ねたり、毎日忙しく動きまわった。

ある日、奨学金などでタイの子どもたちを支援している団体を訪ねた時のこと。

この団体では機関誌を発行していて、毎号その表紙にはタイやラオス、カンボジアの子どもの写真に、その国の言葉で「こんにちわ!」と書かれている。この時ポンピモンさんが手にしたのは、タイの男の子を表紙にしたものだった。

「ここに『サワッディーカ』とあるけれど、これは女の子の使う言葉よ。男の子なのだから、『サワッディークラブ』の方がいいと思うわ」

書いた人が女性で、表紙のことも知らなかった

ので、自分がふだん使う言葉を書いてしまったらしい。

「それに、ちょっとこの文字も読めないわね」日本人が書いたと思ったポンピモンさん、「表紙などに使うのでしたら、タイ人にちゃんと書いてもらえばよかったですね」

しかし、これはれっきとしたタイ人留学生に書いてもらったものだという。それを聞いたポンピモンさんは、「なぜかわしい!!」と、初めてタイ語を書き直し、次回に使う時のために置いてきたとのこと。バンコクでもタイ語のワープロが普及しつつある。(ま)

新人スタッフです よろしくね!

ベトナムの人たちとナマ身のつきあいを

ホーチミン駐在員

新しく開設されるベトナムのホーチミンオフィスの常駐スタッフになる久保英之・早恵さん。二人が結婚したのは2年前。JVCとかかわり始めたのもちょうどそのころだそう。

英之さんは1年間かけて世界一周したモサ。早恵さんは人権・構造問題に関心が深かった勉強家。そんな二人がフツーに暮らしてしまもなく、自分たちの生き方を改めて考え始めた。

「どう生きていくか、夜おそくまで膝つきあわせて話合う日が続きました。で、出た結論が“海外で働こう”だったんです」

「JVCにはワクがない。自分で考え、信じるころに從って行動していく。プロジェクトを成功させた。失敗した。結果だけでなくその過程、そこの人たちといっしょにやっていくことをとても大事にしている。それに共感しま

久保英之さん 早恵さん

した」と英之さんはいう。「考えてばかりいても始まらない。働きながら考えよう。ここでボランティアしているうちに、そう変わりました」と早恵さん。

二人が大切にしたいのはナマ身のつきあい。たくさんの人と食べ、飲み、しゃべりかわしたいとか。

「ベトナムの歴史を知れば知るほど、その中で生きてきた人のエネルギーってすごいと思う。日本と違う彼らの技術も学びたいですね」ついでに料理の技術も学んでくれると、グー!?

“冷静に物を見られる”(英之談)ちっこい早恵さんと、“正直で行動の早い”(早恵談)ガッチリ型の英之さん。凸凹組み合わせれば力三倍。ベトナムの新しい芽が期待されます。



右から鈴木琴子さん、
久保早恵さん、英之さん

タイ北部のリス族の村に11カ月

カンボジアの保健医療スタッフ

「小学校のころから思ってたんです。かわいそう……何かしてあげたいって」70年代終り、当時インドシナ難民のことが連日報道されていた。私も行って働きたい。でも手ぶらじゃいけない。だから大学は迷わず保健学科に進み、助産婦に。

学生時代、タイ北部リス族の村に11カ月。出産周辺の調査に入った。「そこで初めて知ったんです。この人たちは“かわいそうな人々”じゃないって」ないのは救急の医薬品とか、モノだけ。彼女たちには生命力がある。ボロの下に生きる力があふれてる。村の人からもらったものは大きかったという。

「今回も楽しんできたいですね。仕事はたいへんだろう

鈴木琴子さん

けど、その中にきっといろんな発見、喜びがあると思う。同じように、JVCを支えてくださってる多くの方々も楽しんでほしいんです。JVCとかかわったことを。金を出すのは、集めるのはそんなカンタンなことじゃない。でもその過程で、人と出会ったり、心動かされる経験をしたり、それがご自身の楽しみになったらいいなと」

これ、ボランティアの本質かも。5月17日琴子さんはカンボジアへ発った。

「お手紙ください。返事書きます。そしたらお互いもっと楽しいでしょ」

(荻野 洋子)

JVCの活動とその目的に御理解を

▶ JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっか
けに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によ
って運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶ JVCの会員募集について—一会員は、総会に出席し、
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができま
す。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には
機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 学生会員 3,000円
団体会員 30,000円)

▶ 機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ 送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい)

▶ みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民募金 (5月小計 69,500円)
アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われま
す。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (5月小計 85,100円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. カンボジア募金 (5月小計 562,690円)
カンボジア国内の復興のために使われます。
- D. タイ募金(奨学金・スラム・農村) (3月小計 170,000円)
タイの人々の生活向上のために使われます。
- E. ラオス募金 (5月小計 1,047,319円)
ラオスの生活改善プログラムに使われます。
- F. ベトナム募金 (5月小計 19,520円)
ベトナム帰還者及び国内復興のプログラムに使われます。
- G. 定住難民募金 (5月小計 2,000円)
定住難民のための日本語教材費と家庭訪問員の交通費に使
われます。
- H. 環境募金 (5月小計 10,000円)
タイ山間部で、環境を守るためのプログラムに使われます。
- I. JVC運営経費募金 (5月小計 10,000円)
現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われ
ます。
- J. 無指定募金 (5月小計 563,394円)
▶ 送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495(募金種目名をご記入下さい)
加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶ 今月も本誌の発行が遅れてしまい申しわけなく思ってい
ます。あやまりついでもう1つ申しあげると、実はこの
ページで報告している募金の集計のうち1月分の掲載が抜
けてしまいました。ずいぶん以前に読者の方から御指摘が
あったのですが、とうとう掲載する時期を逸してしまいま
した。1月に募金をお寄せいただいた方には本当に申しわ
けございません。

昨年度の皆様からの募金の総額は23,834,422円になりま
した。総収入の23%にあたり、ベトナムとカンボジアの活
動費に相当する額です。皆様の思いがこめられたお金です。
これから大切にに使わせていただきます。

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (5月小計 199名 1,577,910円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設け
ました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使
われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています



1991年6月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所

〒113 東京都文京区湯島 3-1-4 会田ビル5階

☎03(3834)2388 FAX: 03(3835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セン
タービル9F (助)神奈川国際交流協会内
☎045(671)7082

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。